

Title	中国語における「島の条件」
Sub Title	"Islands" in Mandarin Chinese
Author	田島, 英一 (Tajima, Eiichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1994
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.66, (1994. 7) ,p.41(138)- 56(123)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00660001-0056

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中国語における「島の条件」

田 島 英 一

1. かつて J.R. Ross は、その博士論文“Constraints on Variables in Syntax.”(1967)において、言語には「島」のごとき節点が存在することを指摘した。これらの節点は、あらゆる構成要素の抽出を許さず、文中においてあたかも孤島のごとき位置を占めている。こうした「島」の閉鎖的性格を、彼は「島の条件 (island constraints)」と呼んでいる。この論文が発表された時期は、生成文法理論が規則中心から原理中心へと転換しつつあった時期に一致し、標準理論が拡大標準理論へと発展するにあたり、大きく貢献することになった。

しかし、これらの「島」は、主に英語の文法研究から発見されたものであって、必ずしも言語を超えて存在する現象だとは言いきれない。例えば、次にあげる「島の条件」は、中国語において全面的に存在しないか、もしくは部分的にしか存在しない。

(1) a. 文主語の島

* *What is that John does ___ most troublesome?* (英語)

約翰干什麼最麻煩? (中国語)⁽¹⁾

(ジョンが何をすることがもっともやっかいなのか。)

b. 複合名詞句の島

* *What do you like a book that criticized ___?* (英語)

你喜歡批評什麼的書? (中国語)

(君は何を批判した本が好きなのか。)

c. 付加要素の島

* *Who are you happy if ____ likes you?* (英語)

誰喜歡你，你才開心？ (中国語)

(誰が君を好きなら、君は愉快なのか。)

括弧内の日本語が、中国語同様に許容される文であるという点が、興味深い。ある人々はこの事実をとらえて、「中国語や日本語には、疑問詞の移動がないのだから、島の条件を犯してはいない。」と主張するかもしれない。しかし、少なからぬ生成文法学者がLFでのWH句移動を主張している以上、少なくとも生成文法の仮説内において、こうした事実は「島」の普遍性に対する反証となりうる。(2)

こうした矛盾に説明を加えようとした学者に、Huang (1982) がいる。Chomsky のピサ講義に端を発した所謂「GB理論」以来、こうした島の条件の多くは、下接の条件の帰結として説明されるのが、最も一般的である。下接の条件とは、移動要素が複数の境界接点 (bounding node) を越えることを禁止する原理で、英語ではNP、IP (=S) 及びCP (=S') が境界節点に相当する。(1a-c)の英文が受け入れられない事実も、一応この条件によって説明がつく。Huang は、中国語の名詞性疑問詞(例: 「誰」「什麼」「哪個」等)を、下接の条件の制限を受けない広範囲数量表現 (wide scope quantifier) であると見なした。よって、これらの疑問詞は島の条件に従わないが、中国語においても、非名詞性の疑問詞は狭範囲数量表現 (narrow scope quantifier) であり、島の条件に従わなければならない。例えば、(2)と(1b)を比較すると、非名詞性の疑問詞においてのみ、中国語でも複合名詞句の島が観察されることがわかる。

(2) a. * 你喜歡怎麼批評自民党的書？

(君はどんなふうに自民党を批判した本が好きなのか。)

b. * 你喜歡為什麼批評自民党的書？

(君は「なぜ自民党を批判した本」が好きなのか。)

しかし、Huangの説明にはいくつか欠点がある。まず、広範囲数量表現がなぜ下接の条件を無視しうるのかが、説明されていない。もしUGにより先験的に決定していると考えるのであれば、アドホックな仮説を避けるためにも、他言語からの挙例や検証がほしいところである。また、数量表現の広範囲・狭範囲が後天的に習得されると考えるのであれば、これをUGの原理である下接の条件と関連付けるのはいかにもまずい。第二に、Huangが広範囲数量表現とする疑問詞にも、下接の条件に従っているかのように見える例がある。例えば、(3)は(1b)と異なり認められない。

(3) a. * 你喜歡一本批評什麼的書？

(君は一冊の何を批判した本が好きなのか。)

b. * 你喜歡批評什麼的一本書？

(君は何を批判した一冊の本が好きなのか。)

本稿はHuangが用いた下接の条件に替えて空範疇原理 (empty category principle : 以後“ECP”と略称) を用い、こうした矛盾点の克服を目指すものである。⁽³⁾

2. なぜ中国語の名詞性疑問詞が、広範囲数量表現のようにふるまうのか。この問題に入る前に、疑問詞がどのような経路をたどって主文のCP指定部にまで上昇するのかを、明らかにしておく必要がある。

可能な移動経路は、採用する原理の定義によって左右される。本稿では、「障壁」, 「統率」, 「ECP」の定義として、それぞれ(4)~(6)を採用したい。⁽⁴⁾

(4) 障壁 (barrier)

もし β がL表示 (L-mark) されず、しかも α を包含 (include) する時、 β を包含する節点 γ ($\neq\beta$ の投射接点) は、 α にとって障壁となる。

(5) 統率 (government)

もし δ が α を M 統御 (M-command) し、しかも α にとってのすべての障壁が δ をも包含する時、 δ は α を統率する。

(6) ECP

全ての痕跡 (trace) は、先行詞によって統率されていなければならない。

障壁とは、いわば各項 (argument) が不必要な θ 付与や格付与を受けないために引かれた境界線である。例えば、一般に CP は、IP 内部の要素にとって障壁となる ($IP = \beta$, $CP = \gamma$)。従って、(7a) の PRO は、CP 外部の動詞 *try* から統率されない。

(7) a. I tried [_{CP} [_{IP} PRO to win]]

b. * I believe [_{IP} PRO to win]

PRO は束縛原理によって統率されないことを求められているが、(7a) はこの条件を満たしていることになる。これに反し、CP 削除 (CP-deletion) を行う動詞である *believe* は、障壁に邪魔されることなく、PRO を統率してしまう。⁽⁵⁾ここで CP は、PRO を統率から守るための防護壁として機能しているのである。

痕跡は、PRO とは対象的に、ECP によって先行詞からの統率を要求される。例えて言えば、痕跡とは文中における不審人物であって、法 (= ECP) によって信用できる人物 (= 先行詞) からの身元保証 (= 統率) を義務付けられているのだ。しかもこの両者の同居 (= 障壁を隔てないこと) が、身元保証の条件となる。故に移動は、たったひとつの障壁を越えることすら許されない。この意味で、ECP は下接の条件よりも厳しい規定である。この厳しい条件を満たすために、移動要素は付加 (adjunction) を繰り返さざるをえない。目的語の WH 句移動を例にとると、最低 2 回の付加が必要になる。

る。この結果、すべての痕跡が先行詞によって統率され、中国語にとって複合名詞句が必ずしも「島」にならない、という現象が起こるのである。

3. (9)で示されたように、NPの指定部は、脱出ハッチとして利用可能である。だとすれば、次の三つの疑問が残る。

- (10) a. なぜ英語の疑問詞は、複合名詞句の島を脱出できないのか。
(→1b)
- b. なぜ非名詞性の疑問詞は、複合名詞句の島を脱出できないのか。 (→2)
- c. なぜ疑問詞は、量詞を伴う複合名詞句を脱出できないのか。
(→3)

実はこうした問題も、NP指定部という位置の性格を考えてみれば、簡単に説明がつくのである。

まず(10a)についてであるが、正確に言えば、英語の疑問詞も、条件次第で複合名詞句からの脱出が可能になる。

- (11) *Who* likes a book that criticized *what* ?
(誰が、何を批判した本を好きなのか。)

英語では、文内に複数の疑問詞が存在する場合、一つの疑問詞だけが統語部門でCP指定部に上昇し、他の疑問詞は基底生成された位置に残る。この残された疑問詞は、LF部門に至って、はじめて移動規則の対象となる。(11)の*what*も、LFにおいては文頭の*who*と同位置まで上昇しているはずであるが、複合名詞句の外へ移動しているにも関わらず、非文にはならない。つまり、LF部門で移動される限りにおいて、英語でも中国語でも、複合名詞句の島は、名詞性の疑問詞に対してその効力を失うのだ。

ではなぜ統語移動だけが、複合名詞句の島による制限を受けるのだろうか

か。それは唯一の脱出ハッチであるNP指定部が、格付与位置であるからだ。よく知られているように、NP指定部内の名詞句（所謂「NPの主語」）は、中心語である名詞から属格の付与を受ける。

- (12) a. [_{NP}my [_{N1}life]] (Iの属格形)
b. [_{NP}John's [_{N1}book]] (Johnの属格形)

従って、関係節内ですでに格を付与されている疑問詞が、再びこの位置で属格を受けると、PF部門はこの疑問詞を音声的に処理できなくなる。つまり、PF部門の格フィルターを満たすことができなくなるのである。

(13) 格フィルター (Case filter)

音声形式を持つNPは、かならず**一つの格**を付与されていなければならない。

この格フィルターは、統語移動される要素が、NP指定部を脱出ハッチとして利用することを許さない。結果として、(1b)のような英文は非文となる。これに反して、LFでの移動は、格フィルターから何の制限も受けない。なぜなら、格付与は（少なくともGB理論の枠組みにおいて）統語部門で行われ、しかも格フィルターは、PF部門で適用される原理だからである。英語のwh-in-situや中国語の疑問詞は、LF部門で移動するがゆえに、PF部門の呪縛をのがれているのだ。

次に、(10b)について考えてみる。英語では一般に、(12)のmyやJohn'sのような名詞的要素が、NP指定部の位置に現れる。そしてこの事情は、中国語においても変わりがないように思われる。例えば中国語のNP指定部として現れる要素に、量詞が挙げられる。量詞は中心語である名詞との間に、かなり厳しい選択制限を見せる。「一冊の本」は「一本書」であって、「一個書」ではありえない。「二機の飛行機」は「両架飛機」であって、「両張飛機」とは言えない。つまり中心語である名詞は、量詞によ

って下位範疇化されていることになり、量詞を付加語と考えることには無理がある。しかも「一本我買的书（一冊の私が買った本）」や「兩架很大的飛機（二機の大きな飛行機）」のように、間に別の要素を差しはさむことができるので、補語のようにも見えない。従って、消去法で考えると、量詞はNPにおいて指定語の位置を占めることになる。この量詞もまた、文中において主語や目的語となりうる要素であって、(12)の *my* や *John's* 同様名詞的要素だと言って差し支えない。

- (14) a. 我買了一本。
 (私は一冊買った。)
- b. 那兩架起飛了。
 (あの二機は離陸した。)

このようにNP指定部の位置には、言語の別を問わず専ら名詞的要素が現れるように見受けられる。だとすれば、NP指定部には、次のような選択制限が課せられているはずである。

- (15) * [_{NP} [-substantive] [_{N1...N...}]]

投射原則 (projection principle) は、こうした制限がすべての部門において守られることを要求する。ゆえに、非名詞的な疑問詞は、統語移動かLF移動かを問わず、NP指定部への代入を拒否されるのである。その結果ECP違反が起り、(2)のような文は非文になる。

最後に (10c) についてであるが、これも量詞がNP指定語であることを考えれば、当然の帰結である。まず (3a) のように、量詞と名詞の間に関係節がある場合について考えてみよう。この場合、関係節はN1の付加語だと考えられる。

- (16)... [_{NP} 一本 [_{N1} [_{CP} 批評什麼] [_{N1} 書]]]

N P 指定部は、既に「一本」によって占拠されている。従って「什麼」をこの位置に代入することがかなわず、E C P 違反が起こる。次に (3b) のように、関係節が量詞よりも前に位置する場合について考えてみる。この場合、関係節は N 1 ではなく N P の付加語になるはずだ。

(17)... [_{VP} 喜歡 [_{NP} [_{CP} 批評什麼] [_{NP} 一本書]]]

(17)において、「什麼」は関係節 C P の指定部から、直接主節の V P に付加されることになる。この際、関係節 C P の指定部に残された痕跡にとって、主節の V 1 もしくは V P が最小障壁に相当する (β =関係節 C P)。いずれにせよ、この最小障壁は V P に付加された痕跡を包含せず、関係節 C P の指定部に残された痕跡は、先行詞による統率を受けることができない。ゆえに、(17)も E C P 違反を引き起こすのである。

このように、E C P を用いて説明すれば、Huang が行ったような数量表現の分類が不要になるばかりでなく、(3)のような矛盾も容易に解決できるのだ。

4. 以上の仮説については、一見反証例とも見える文が存在する。例えば、次の文は徐烈炯氏によって指摘されたものである（個人的談話において）。

(19) 〔怎麼焼的蛋〕最好喫？

(どう調理した卵が、一番おいしいか。)

括弧は、複合名詞句を示す。括弧内の「怎麼(どう)」は、無論非名詞性疑問詞である。にも関わらず、主節は WH 疑問文となっており、L F では「怎麼」が主節の C P 指定部に上昇しているかのように見える。だとすれば、非名詞性疑問詞が脱出ハッチ (= N P 指定部) の利用を拒否されると

いう本稿の仮説と、明らかに矛盾することになる。

しかし(19)は、かなり例外的なケースだと言わなければならない。ここでは「怎麼焼(どう料理する)」が関係節になっているわけであるが、よく見ると、この表現は関係節としての基本要件を満たしていない。節ならば当然主語を伴うことが可能なはずであるが、「怎麼」を含む関係節では、主語に限らず、動詞以外の殆どの要素が共起不可能になる。

- (20) *〔那個廚師怎麼燒的蛋〕最好喫? <+主語>
(あのコックがどう調理した卵が、一番おいしいか。)
- *〔怎麼燒蛋的菜〕最好喫? <+目的語>
(どう卵を調理した料理が、一番おいしいか。)
- *〔怎麼燒好的蛋〕最好喫? <+結果補語>
(どう調理を済ませた卵が、一番おいしいか。)
- *〔怎麼燒三分鐘的蛋〕最好喫? <+時間表現①>
(どう三分間調理した卵が、一番おいしいか。)
- *〔昨天怎麼燒的蛋〕最好喫? <+時間表現②>
(きのうどう調理した卵が、一番おいしいか。)

こうした例を見ると、(19)の「怎麼焼」が関係節であるかどうかは、極めて疑わしいように思われる。むしろ「怎麼焼」全体で、ひとつの疑問詞だと理解されているのではないだろうか。英語の *how* には、"how long" "how many" "how much" のような慣用的表現が多いが、中国語の「怎麼」も、同様にいくつかの慣用的表現を派生している(例:「怎麼樣(いかが)」「怎麼辦(どうしよう)」等)。「怎麼+動詞」という条件で、「怎麼樣」のような派生語として再構成(reconstruction)をうけているのだとすれば、上記の「怎麼焼」がなぜそれ以外の要素と共起しえないのか、一応説明がつく。また派生語であるとするれば、英語の "How much money do you have?" の *how much* が *money* を伴って上昇するのと同様、「怎麼焼」が「蛋」を伴い、「怎麼燒的蛋」全体でWH移動しているものと考え

えることができる。この問題は更に検討を要するが、私の推測があたっているとすれば、(19)は上述の仮説に対する反証例にならない。

5. 最後に、文主語の島と付加要素の島について考えてみたい。これらの島についても、ECPによって、なぜ英語において観察されるかを説明できる。

(21) $[_{CP} WH [_{C1} [_{IP} t2 [_{CP} tI [_{IP} \dots tO \dots]]] [_{I1} \dots]]]]]$

文主語

(22) $[_{CP} WH [_{C1} [_{IP} [_{IP} \dots]]] [_{CP} tI [_{IP} \dots tO \dots]]]]]$

従属節 (付加要素)

(21-2) の下線部が、それぞれ島にあたる。この二つの島の共通点として、いずれもL表示を受けていないことを指摘できる。例えば(21)だが、文主語CPは非語彙範疇であるIから格付与を受けるため、L表示されていない。すると $\alpha = tI$ 、 $\beta =$ 文主語CPが成り立つので、主節のIPが痕跡tIにとっての最小障壁となる。このIPはtIの先行詞であるt2を含まないので、ECP違反が起こる。故に、文主語は「島」になるのである。付加要素については、いずれの中心語も格や θ 機能を付与しない。従ってL表示されず、(22)のtIを例にとると、主節のC1が最小障壁になる($\beta =$ 従属節CP)。このC1もまた、tIの先行詞であるWHを含まない。結果として、従属節のような付加要素は「島」になる。

ここで問題になるのが、(1a.c)の中国語文である。既にふれたように、中国語における文主語や付加節は「島」にあたらない。この事実は、中国語の主語や付加節がL表示されていることを、我々に示唆している。実際Cole (1987)は、主語に格を与えるIが、中国語では適正統率語(proper governor)にあたるとしている。⁽⁶⁾彼はHuangの分析に基づきつつ、INFL統率変数(Ifnl government parameter)の存在を主張した。この媒介変数によって、I(NFL)が適正統率語になりうるかいかなが決

定される。I が適正統率可能と判断されると、その言語では空主題 (null topic) や空主語 (null subject) が許容されるようになる。

(23) 中国_i, 地方很大。0_i人口很多。

(中国は, 国土が大きい。[中国は] 人口が多い。)

(24) 張三_i說0_i看見了李四。

(張三は, [自分が] 李四を見たと言う。)

周知の如く、英語においては、(23)のようなある意味であいまいな表現は許されない。「地方 (土地)」や「人口」が何に属するものなのかを明示する必要があり、必ず”China, its land area is very large. Its population is very big.”というふうに代名詞 *its* を用いる。Cole は、中国語には音声形式のない主題 (例文中の *0*) が存在し、これによって何の「人口」なのかが明示されると述べている。(24)の文も、英語であれば”Zhangsan says that he saw Lisi.”と、代名詞 *he* を含む形に置き換えられるはずである。この場合、「説」の補文の主語は、やはり音声形式を持たない *0_i* によって示されていることになり、意味上の混乱は起こらない。英語にこうした空語類が存在しないのは、先に述べた媒介変数の変数値を決定するにあたって、英語圏で育つ子供達が、マイナスの値を選択するからだという。空主語や空主題が認可 (license) されるためには、適正統率が必要になる。しかしこの変数値がマイナスになれば、I は適正統率を行えない。それで、空主語や空主題が出現不能になる。

しかも中国語の I は、主語ばかりでなく、主題に対しても主格の付与を行う。例えば、(23)の「中国」は、主題の位置に基底生成されている。もし I がこれに格を与えないとすれば、(23)の文は格フィルター違反になってしまう。

以上は Cole の述べるところであるが、もしこれが事実であるとすれば、我々の謎は解ける。I が適正統率を行うということは、中国語において、I が語彙範疇に属することを意味する。しかも主語 (= I P の指定

語)や主題 (= I P の付加語)に格を与えるのであるから、中国語の I は指定語や付加語を L 表示する、とすることができる。つまり中国語では、文主語も I P に付加された従属節も、皆 L 表示を受けているのである。だとすれば、この両者が「島」にならないのは、当然だと言わなければならない。

(24) $[_{CP} \text{ 什麼 } [_{C1} [_{IP} t2 [_{1P} [_{CP} t1 [_{IP} \text{ 約翰干 } t0] \text{ 最麻煩}]]]]]]]$ ⁽⁷⁾

(25) $[_{CP} \text{ 誰 } [_{C1} [_{IP} [_{CP} t1 [_{IP} t0 \text{ 喜歡你}]] [_{1P} \text{ 你才開心}]]]]]]]$

(24-5) は、(1a,c) の中国語文の L F を簡略化して示したものである。(21) では不可能であった $t1$ から $t2$ への移動が、(24) では可能になる。 $t1$ にとっての最小障壁は、文主語 CP が L 表示を受けた場合、主節の C 1 にまで拡大される (β = 主節 I P)。この C 1 は $t1$ にとっての先行詞 $t2$ を包含するので、先行詞による統率が成立し、ECP が満たされる。(25) の $t1$ も、ECP には抵触しない。この痕跡にとっての最小障壁は主節の CP であるが (β = 主節 C 1 ; ちなみに従属節 CP は、I から L 表示を受けるので、 β にはあたらない)、無論この CP は先行詞「誰」を包含する。こうして中国語からは、(1a,c) のような「島」が消え去るのである。

Cole の主張が正しければ、次のような予測も成り立つ。(1b) の中国語文が合法なのは、複合名詞句の NP 指定部が脱出ハッチの役割を果たしているからであった。そしてこの NP 指定部が脱出ハッチであるためには、複合名詞句全体が L 表示されていることが条件になる (さもないと、複合名詞句を包含するすべての節点、NP 指定部内も痕跡にとって障壁となるため、NP 指定部内からの移動が不可能になる)。だとすれば、複合名詞句が主語や主題の位置を占めていたとしても、やはり (1b) 同様「島」にはならないはずである。なぜなら、(1b) の複合名詞句が動詞「喜歡」によって L 表示されていたように、主語や主題も I からの L 表示を受けるからだ。この予測が正しいことは、事実によって裏付けられる。

- (26) a. 武松打死了老虎。
 (武松は虎を殴り殺した。)
- b. 関公胡子很长。
 (関公は髭が長い。)
- (27) a. [_{NP} [_{CP} 喜歡喫什麼] 的好漢] 打死了老虎?
 (何を食べるのが好きな豪傑が、虎を殴り殺したのか。)
- b. [_{NP} [_{CP} 和誰結拜為把兄弟] 的好漢] 胡子很长?
 (誰と義兄弟の契りを結んだ豪傑が、髭が長いのか。)

(27)は、(1b) に比べて何の遜色もない合法文である。

6. 複合名詞句の「島」は、NP 指定部が脱出ハッチとして利用される場合、観察されない。そしてこの脱出ハッチの利用には、三つの条件が付く。まず第一に、利用はLF部門において行われなければならない。統語部門での利用は、格フィルター違反を招く。第二に、移動される要素は名詞性のものに限られる。なぜなら、中心語の名詞が、その指定部として名詞性の要素(例えば量詞)を求めるからである。こうした語彙の特性は、投射原則によって、基底部門ばかりでなく、LF部門においても保持されている。第三に、このNP指定部が空白になっていなければならない。(1b)の英文は第一の条件によって、(2)は第二の条件によって、(3a)は第三の条件によって、それぞれ非文となっている。

文主語や付加要素の「島」は、Iが非語彙範疇に属する言語においてのみ観察される。中国語のように、IによるL表示が可能な言語では、主語・付加語と目的語との間に、非均衡状態(asymmetry)が見られない。

この仮説に依れば、疑問詞の分類(=広範囲/狭範囲)は不要になる。そもそも下接の条件という原理に例外を設けることは、好ましいことではない。また、ある言語においてどの疑問詞がどちらの範疇に属するのかを判別しなければならないとしたら、言語習得における幼児の負担を、いたずらに重くする結果となる。しかも、Huangの言う広範囲数量表現が

「広範囲」をとりうるのは、移動がL F部門で行われる場合に限られるという但し書が付くわけであるから、文法は二重三重に複雑化する。本稿で主張した仮説は、少なくとも説明的妥当性において、疑問詞を分類する立場よりも前進しているのではないかと考える。

[註]

- (1) ここで言う中国語とは、大陸の「普通話」と台湾の「国語」とを含めた、広い意味での標準中国語である。この標準中国語は、方言の干渉を受けやすいため、文法性の判定にしばしば地域差が認められるという点を、お含みおきたい。今回は、下記のインフォーマントに協力を依頼した。記して謝意を表したい。
王啓心 (24歳。女性。江蘇省南京市生まれ。生後まもなく同省無錫市に転居。更に10歳の折、上海市に転居、今日に至る。父は無錫人、母は上海人。)
- (2) 但し、生成文法学者の中にも、E. WilliamsやL. Rizziのように、L Fの存在に対して懐疑的な学者が存在する。
- (3) 本稿は、第26回国際シナ・チベット語学会(1993年9月、大阪)における発表原稿を日本語に翻訳し、更に若干の加筆修正を行ったものである。発表に至るまでの過程で、慶応義塾大学言語文化研究所長・川本邦衛先生、復旦大学外文系主任・徐烈炯先生から、数々の有益なアドバイスを頂戴した。ここに衷心より謝意を表したい。
- (4) (4)はChomsky(1986b)の最小条件(minimality condition)を若干修正したものである。L表示やM統御については、Chomskyの定義に準ずる。
- (5) Chomsky(1981), 第二章参照。
- (6) 適正統率とは、語彙範疇による統率を指し、本稿で言う「L表示」にほぼ等しい概念である。
- (7) 論旨に直接関係のない中間痕跡は、省略した。

[参考文献]

- Chomsky, N. (1981). *Lectures on Government and Binding*. Foris Publications.
- Chomsky, N. (1986a). *Knowledge of Language*. Praeger Publishers.
- Chomsky, N. (1986b). *Barriers*. The MIT Press.
- Cole, P. (1987). "Null Objects in Universal Grammar," *Linguistic Inquiry*

18, p.597-612.

Huang, J. (1982). "Move WH in a Language without WH Movement." *The Linguistic Review* 1, p.369-416.

呂叔湘等編 (1980). 『現代漢語八百詞』 (商務印書館)

Ross, J. (1967). *Constraints on Variables in Syntax*. MIT Phd dissertation.

田島英一 (1988). 「中国語におけるNP構造と α 移動をめぐって」 (芸文研究52号, p.254-275)

Tajima, E. (1994). "The Specifier Position of Chinese Nouns as an Escape Hatch." *Current Issues of Sino-Tibetan Linguistics*, p.365-370.

湯廷池 (1984). 「国語里“移動 α 的”邏輯形式規律」 (教学与研究6号, p.79-114.)